

出石経由の道 京街道

古来、わが国の土木技術は自然のもつ力を活かすことによって、人間も共に生きようという“自然と人のふれあい”から始まりました。明治の初めまで交通の大動脈として人々の生活を支えてきた多くの街道もそんな“自然と人のふれあい”が大地を丹念にきざんできたものです。しかし今、科学技術に頼りすぎた私たちは、自然への順応、自然との共存という日本人本来の自然感が薄れ、服従の対象として自然を見るようになってしまいました。引き継がれた多くの土木遺産は、祖先が育んできた“自然と人のふれあい”を思い起こさせるかのように今、私たちに無言のうちに語りかけています。



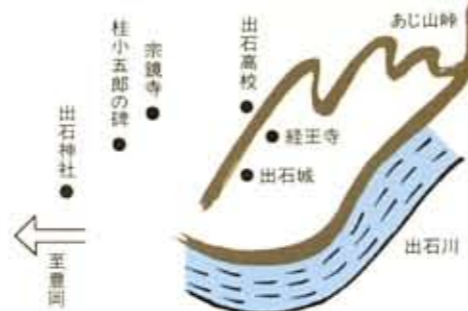
山あいの小京都、出石を京の都につないだ道

京街道は旅大好き人間で大盛況

兵庫県北部の静かな山あいの盆地に“但馬の小京都”と呼ばれる小さな城下町、出石町があります。神代の時代からの豊かな遺産と江戸期の遺構を残す町並みが、訪れる人を束の間のタイムトリップへ誘い込む美しい町です。この町中を東から北へ大きく湾曲する出石川に沿って、そのむかし、京街道は走っていました。北へ向かえば豊岡を経て山陰街道に、東へ向かえば福知山を超えて京へ至る道です。江戸時代、この街道は行き交う旅人たちがたいへん賑わっていました。“下に～、下に～”と出石藩や豊岡藩の大名行列も通りましたし、町人たちも“ちよいと物見遊山に”と京都や大阪あたりへ気軽に遊びに出かけたのでした。この時代、人々は、現代の私たちが想像するよりずっと頻りに旅を楽しんでいたようです。そして幕末、薩長が佐幕派で日本中が大きく揺れ動いたとき、長州や薩摩の藩士が京を目指してぞくぞくとのぼってきましたが、彼らの決意に満ちた足音を響かせたのもこの京街道でした。



京街道の碑



国ざかいの宿場町に関所あり

街道沿いの宿場町としてたいへん栄えたのが京都府と境を接する但馬町の久畑です。今、久畑一帯は“歴史散策の里”になっていて、白壁に格子戸といった当時の町並みや石畳の小道がよく保存されています。付近には京街道の古い道標も多く、二重連水車小屋や炭焼き小屋などもあって、江戸時代の人々の生活をそこはかとなくしのばせてくれます。久畑は登尾峠の麓にあり、この峠が但馬と京の国ざかいになっていました。峠の上には昭和の初め頃まで尼寺と茶屋が残っていたそうです。その尼寺の尼僧が口にくんだ吹き針で賊を追っばらった話など、峠にまつわる小さなエピソードも伝えられています。この国ざかいの峠の麓にあったために、久畑にはもうひとつ大役がありました。関所です。現在、その跡は史跡として保存されていますが、幕末の激動期、京都から脱出をはかった薩長の志士・桂小五郎があやうくつかまりそうになったのが、この関所だったのです。蛤御門の変に敗れた小五郎が、出石に身を隠すために京街道をくだった1864年7月のことでした。

薩長の志士桂小五郎に再生の力を与えた出石

出石への案内役をつとめた出石商人広戸其助の機転で久畑関所を通過できた桂小五郎は、無事、出石城下に潜入します。しかし、京から密偵らしい男が城下に入り込んでくることが多く、小五郎は其助の親族の家や寺院などを転々とし、ときには城崎まで逃れたこともありました。出石城下に潜伏した8ヵ月間に、小五郎はなんと7ヵ所も潜居を移しています。潜居跡にはそれぞれ碑が建てられています。中でもひととき大きな碑が菅田町にあり、“維新史蹟／薩長志士桂小五郎再生之地”と彫ってあります。実はこの場所、小五郎は広戸孝介という偽名を使って荒物商を営んでいたのです。当時の小五郎は敗戦の痛手で心身ともやつれ果てており、衰弱した体を出石の片隅で休めながら機を熟すのを待っていました。桂小五郎のちに木戸孝光と名を改め、維新三傑の1人として歴史に残る偉業をなしますが、出石はまさに小五郎再生の地であったと言えます。



出石神社



桂小五郎の碑



沢庵和尚のふるさと今、近代化の波が...

神々が活躍した神話の里

ところで、原始の出石は一面泥海の世界でした。そこへやってきた朝鮮半島・新羅の王子アメノヒボコが瀬戸(津居山)を切り開いて、アツというまに沼地を耕地に変えてしまい、そこに定住して土地の娘と結婚し、その子孫は末長く栄えていったということとす。

これは「古事記」「日本書記」「播磨国風土記」などに書かれたアメノヒボコ渡来伝承と瀬戸の切戸にまつわる国造り伝説ですが、半島からの渡来人集団がもたらしたすぐれた土木技術が、このような神話となって語りつがられてきたのかもしれない。

町の北、宮内地区にある出石神社には、但馬開苑の祖神としてアメノヒボコと、彼が持ってきた鏡、玉など8種の宝が祀られています。創立年代は不明ですが、859年には但馬第一の大社であったことが記録に残されています。ヒボコはのちに国土開発の神様として、広く土木・建築関係者の崇拝を集めるようになりました。

孤高を愛し、出石を愛した沢庵和尚

出石は四方1キロほどの小さな町ですが、その中に寺院が20以上もあります。これは出石城を囲むように作られた町並みの要所要所に防備のために寺院が配置されたため、京街道の東口には経王寺など、西の街道口には法城寺など、多くの寺院群が建てられました。現在でも経王寺と見性寺には、往時をしのばせる構形の鐘楼や銃眼が見られます。

さて、数多いお寺の中でも宗鏡寺といえば名刹。たくあん漬や剣豪宮本武蔵の師としてよく知られる沢庵和尚のお寺です。和尚は1573年、ときの藩主山名氏の重臣の子として出石城下に生まれました。幼くして宗鏡寺に入門し、43歳のとき、荒れ果てて有名無実となっていた宗鏡寺を再興します。

そののち寺の裏山に投瀧軒と名付けた小さな庵を結び、自給自足、一衣一鉢の仙人のような生活をおくりながら著作に没頭し和歌を楽しんでいました。しかし晩年、將軍家光の熱烈な帰依と愛



宗鏡寺鐘つき堂
願を受けて束縛の身となり、和尚は我が身ひとつままならぬことを嘆き、投瀧軒をなつかしみつつ一

生を終わったのです。この投瀧軒時代に和尚が工夫したのが「たくあん漬」で、庶民の食卓の必需食品としてたちまち全国に広まりました。出石の代表名物は「皿そば」と「出石焼(磁器)」ですが、この「たくあん漬」も忘れてはならない名産です。ちなみに出石そばは、江戸時代に、信州から配属された藩主千石氏がそば職人をつれてきたことに始まります。

京街道は今、国道426号線に

城下町出石の繁栄を支えてきた京街道は、明治のなかばに改修工事が行われ、車馬が通れる道として一層重要なルートになります。そして車馬から自動車へと時代が変わった昭和30年代、ついに全面的改修に入りました。38年、街道の難所だった登尾時にトンネルが完成したのと同時に兵庫県側・京都府側の道路も改修が完了。こうして京街道は昭和の世に自動車道として生まれ変わりました。これが今の国道426号線です。

現在さらに、新登尾トンネルや但馬空港の建設、それに工業団地の開発など、但馬近代化を目指す大きなプロジェクトが動きだしています。その一方で、古都のロマンをまだまだいっばい残した出石を近代化の波にさらすことなく、豊かな自然と先人の大切な遺産を守り抜こうとする、ふるさと保存運動も高まってきています。

資料協力:出石町郷土歴史研究会 岡本久彦氏



出石城下



登尾トンネル



京街道